

10月第2週の礼拝説教

■日 時：2022年10月9日（日）10：30－11：30 聖霊降臨節 第19主日

■説 教：保科けい子 牧師

■説教題：「仲介者、キリスト・イエス」

■聖 書：テモテへの手紙一 2章4－6節（新約 p385）

■讃美歌：51「愛するイエスよ、われらここにあり。」530「主よ、こころみ うくるよ
り、」

9月中旬からPCの調子が悪くなり、子供たちにアドバイスを受けながら何とか使用していましたが、9月末の水曜日の夕方からダウンしてしまいました。業者を呼んで木曜日に修復しましたが、先週の日曜日の夕方に完全に電源が入らなくなってしまいました。月曜日に再び業者に連絡しましたが、この時には新しくPCを買い替えるつもりでした。幸いなことに、火曜日の夜に新しいPCが入手でき設定してもらいました。普段から、データはUSBメモリーにも保存していましたが、肝心の聖書のアプリのデータは取れなかったもので、古いPCから新しいPCにデータを移行してもらうことに希望をかけていました。しかし、業者の作業では移行できませんでした。それで、先週はずっと落ち込んでしまいました。けれども、金曜日には新しいPCで週報を作成できたので一安心しました。そして、昨日の土曜日の午前に私がいつも愛用している新共同訳聖書のアプリをネットで新しく購入し、多くの時間をかけて何とか使用できる状態になりました。さらに、その日の夕方には長男が来てくれて、旧約聖書のヘブル語原典や新約聖書ギリシャ語原典など、様々な外国語の聖書が数十冊入っているアプリのデータを復活させてくれました。最初に、ギリシャ語でマタイによる福音書の本文が文字化けした状態からきちんと正確に立ち上がった時には、本当に感激しました。長男は近くに住んでいるのですが、日曜日にも仕事であることが多いことを理由にまだ立川教会の礼拝には出席していません。しかし、この作業を通して、彼の技術がどんなにか私の説教の準備に役立つかを本心から感謝して伝えたので、いつの日か、皆様方とともに礼拝に与れるのではないかと考えています。

さて、9月の第一主日から、毎週の礼拝で告白している「使徒信条」に関連する聖書の御言葉をご一緒に考えておりますが、先週からその第二部に入りました。「**我はそのひとり子、我らの主、イエス・キリストを信ず**」から始まる箇所です。ここには、神の独り子であるイエス・キリストを信じる信仰が語られています。先週はその最初に位置する「**その独り子、我らの主**」という言葉から、主イエス・キリストが神の独り子であられ、私たちの主であるということについて、ヨハネによる福音書3章16節から17節に「**16 神**

は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。17 神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。」と記されていることを確認しました。

そして、本日はその続きの「イエス・キリスト」という言葉をご一緒に考えていきたいと思えます。なぜなら、「**我らの主**」である「イエス・キリスト」を信じると使徒信条は告白していますが、それがキリスト教会の基本的信仰だからです。私たちは教会の礼拝につながるようになってから、「主イエス・キリスト」とか「主イエス」という言い方を普通にするようになっていきます。しかしよく考えてみると、私たちは、イエス・キリストが「**私たちの主**」であるということあまり真剣に考えていないのではないのでしょうか。よく言われることですが、「イエス」と呼び捨てにするのは失礼な気がするし、「神様」と呼ぶのだから「イエス様」と呼んだほうがよいのではないか、しかしこの呼び方は子どもみたいな感じがするので「主イエス」と呼んでおこう、という程度の軽い感覚で「主」という言葉が用いられているように思われます。

しかし、「主」という言葉は一般には「主人」という意味であることを考えると、イエス・キリストが「**我らの主**」であるというのはとても重要なことなのです。「**我らの主イエス・キリストを信ず**」という使徒信条の言葉は、私たちの主人はイエス・キリストであるのだから、私たちは主であるイエスの僕として従う者である、という信仰を言い表しているのです。言い換えれば、私たちの人生の主人は私自身ではなくてイエス・キリストであるということになります。しかし私たちは皆、自分の主人は自分であると思っていますので、当然のことながら、自分の人生は自分のもので誰かに支配されることがあってはならず、自分の思い通りに生きることが望ましい、といつも考えているのではないのでしょうか。けれども、私たちがイエス・キリストを信じると告白するときには、私たちは自分自身の最も核となる中心部分をイエス・キリストに譲り渡すのです。それがイエス・キリストを信じるということであり、キリストによる救いに与るということです。ですから、「**我らの主イエス・キリストを信ず**」という使徒信条の言葉は、私たちの人生に大きな転換をもたらすほどの重要なことを告白しているのです。

ところで、本日の聖書の箇所には、聖書における神と人間の本来の関係が示されています。聖書においては、私たち人間は主人ではありません。使徒信条の最初に「**我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず**。」と告白したように、神が主人なのであって、人間はそ

の僕であり従う者です。それが聖書における神と人間の正常な関係なのです。そして使徒信条は、神がこの世界を創造して下さったのは私たち人間への愛によってであると考えています。旧約聖書の創世記によれば、初めに神は人間が生きることができる場としてこの世界を創造し、全ての準備が整ったところで、最後にご自分にかたどって神に似た者として人間を造って下さいました。それは、人間が神の愛に応答して神との交わりに生きることができる自由な者として造られたということです。テモテへの手紙一2章4節ではそのことを「**神は、すべての人々が救われて真理を知るようになることを望んでおられます。**」と述べています。しかし、人間はこの神との本来の関係を失ってしまっているの
で、神を愛し神に従って神と共に生きることを、不自由で窮屈なことと思ひ、自分が主人となって神なしに生きるようになったのです。それが人間の罪の根本であると聖書は語っています。

そこで、テモテへの手紙一2章5節では、神との本来の関係を自ら断ち切って罪の中に沈んでしまった人間が、いかにして本来の関係に戻ることができるかということ述べています。父なる神がイエス・キリストを私たちの主として立てて下さった、そこにこそ私たちの救いがあるということです。そして、その救いは「**神と人との間の仲介者**」である主イエスが、神としての栄光を放棄して私たちと同じ人間となってこの世を生き、「**すべての人の贖いとして御自身を献げられました。**」と記されているように、私たち全ての者の罪を背負って、十字架にかかって死んで下さったことにより、成し遂げられるのです。ここに、神と私たちとの正常な関係が回復されるのです。キリスト教会が、いつでも語り続けてきた救いがここにあります。本日の箇所のように、聖書の中で、「**キリスト・イエス**」と記されるときには、主なる神様であるイエスという面が強調されていると言われています。そのことをも頭の片隅に置きながら、私たちが使徒信条を告白するとき、あなたはそのことを心から信じているか、ということをつつも問われていることを覚えたいと思います。